



私のお勧め本：トルストイの「イワンのばか」

40年以上前からここに残る本でした。

F R B (Federal Reserve Bank) の前議長などは今日の経済状況を100年に一度の大事態と表現する昨今、既に好景気に沸いていたアイスランドなどは国自体の存立が困難になっている状態です。アメリカの自動車産業のビッグ・スリー(GM、クライスラー、フォード)や巨大銀行でさえも、それぞれ融資が必要と言うなど、アメリカ経済の根幹に反するような要求を出しています。この状況は私にトルストイの「イワンのばか：The foolish Ivan、(勿論トルストイはロシア語で書いているのですが)」を思い出させました。イワンのような考え方で生活をしていたなら、決してこんな事態にはならなかっただろうと思えるからです。

1885年にトルストイはこの話を書いています。これに対してフランス人の作家ロマン・ローランは「これは最高の芸術である」と評価しています。ロマン・ローランも優れた作品(ジャン・クリストフ、魅せられたる魂など)を残していますしノーベル文学賞も授与されている有名な人です。

トルストイ自身は帝政ロシアの大伯爵でしたが、彼の「戦争と平和」の主人公であるピエールが彼の分身であると言われるように立派で真面目な人だったようです。しかしながらこの話ではロシアの古い民話を題材にして、末弟イワンとお金儲けの好きな次男、軍隊が好きで將軍になる長男、イワンと同じようにばかといわれる妹の4人に対して、3匹の悪魔ともう一匹の悪魔の親分が、4人の兄弟をどのように仲良くしなくなるかを競わせます。長男や次男についての悪魔は長男や次男を上手に操ってよい気分させたところでそれぞれ失敗するのでイワンのところで食べさせてもらうようになります。イワンのところに行った悪魔はどんなことをしてもイワンはへこたれずに良く働きます。3匹の悪魔はそれぞれ長男や次男をたぶらかせた手段でイワンを墮落させようとします。しかしイワンはよく田畑を耕します。イワンは王様のお姫様の病気を治して彼女と結婚することになるのですが、そのお姫様もドレスを脱いでイワンと働くことになります。イワンの妹は困った人に対して食べ物を分けるのですが、それまでさんざんに騙されてきたので今では「手に働いた後の豆があるかないか」で食事の順番を判断するようになります。「手に豆の無い人は皆が食べ終わった後の残り」を食べるように決めたのです。

長男、次男それに悪魔の親分も「手に豆が無い人」だったので残り物しか与えられません。それにイワンたちは素朴に信仰心が強いので「あんたに神さまから祝福がありますように！」と言われてしまうと悪魔の親分は子分達よりも

大きな穴を地面に残して消え去ります。

イワンについての悪魔はイワンをやっつけることに失敗してどんな病も治す気の根っこをイワンにやります。長男についての悪魔は藁束から兵隊をいくらでも作る方法で長男を失敗させます。次男についての悪魔は木の葉を金貨に変える手段で次男を失敗させました。その2匹の手段もイワンには効き目が無く、地面に小さな穴を残して3匹とも消えてしまいます。親分もあらゆる手を使いましたがイワンと妻になったお姫さまとイワンの妹の勤勉に働く生活態度に勝つことはできませんでした。

これは1885年にロシアでトルストイが経験し考えた資本主義経済への警告といえるでしょう。今日の100年に一度の大不況の原因を考えるとイワンのばかりには勝てないことがわかるでしょう。